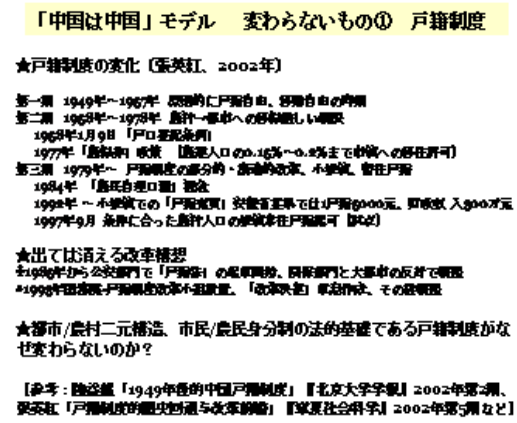
だ依然として有効であり、生き続けるのか、かつ変えようとしないのか、ということです。今のところの仮説は、われわれが不合理と考えるこれらの制度が、実は中国式市場化のもとでは合理的なのかも知れない。安定と権力の基盤なのかもしれない、ということです。

図X



土地の公有制度は明らかに中国共産党の権力の最大のよりどころです。ですから、体制の転換がない限り絶対に手放さないというのはわかりますが、二元的な戸籍制度もそうなのかもしれません。あるいは江戸時代の「目安箱」を思わせる信訪もそうなのかもしれません。

ようするに、もっとも避けたい「中国は中国モデル」でとりあえず徹底的にアプローチしてみようか、といま考えています。自分の中に無意識にある近代的パラダイムからいったん自分を解放してみよう、ということです。これは結構むずかしい作業となります。

そのようなわけで、いま挑戦の途上であり、まだはっきりした結論があるわけではありません。問題提起をし、皆さまからいろいろなご意見をうかがいたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

○座長　非常に整理された、わかりやすい報告だったと思います。コメントは避けまして、続いて私の報告になります。持ち時間の 15 分をしっかり守って報告します。

「和諧社会と開発政治」
加々美光行（愛知大学）

ここでは新しい概念として「開発政治」という言葉を使います。昨年暮れに私がＩＣＣＳのシンポジウムで提起しました方法論では「コ・ビヘイビオリズム（co-behaviorism)」という横文字を使ったため非常に評判が悪かったのですが、「開発政治」もこの方法論と深くかかわります。

改革者的な価値論、理想論から中国はこうある「べき」と主張する様々な「べき論」はたくさんありますし、また観察者的な現実論から中国の事実はこのようで「ある」という議論もたくさんあります。私が張玉林先生を大変尊敬しておりますのは、張先生の報告は中国の国内で、しかも実際に改革を目指して提起されているという点に特徴があります。単に傍観者、観察者として問題を提起しているわけではありません。実際の研究のなかで、具体的な紛争、１つ１つの事件に研究者地震の主体を埋め込みつつ解決策を提起することこそが、最も問題を深く分析し、かつ明示的な解決方法を提起できる方法であるというのが私の方法論です。

今回、さまざまな方々が改革者の立場に立脚して発言されました。例えば、高橋五郎先生が協同組合を組織することを提案したのもその一例です。協同組合とは何かという定義が曖昧だという批判はありましたが、これも１つの具体的な改革の方向を示したものです。それから朱安新先生が「社区」の問題を出しましたが、これまた具体的な改革の方法を示そうとしたものです。

2005 年にＩＣＣＳが行った国際シンポジウムの際、カリフォルニア大学のリチャード・ボーム（Richard Baum）が、フィードバック・システムが中国社会には欠けていると問題提起しました。

フィードバック・システムとは、言い方を変えれば、ハーバマス（Jürgen Habermas）的な公共圏（空間）が中国には欠けているということです。朱先生の今回の問題提起は、この公共圏の欠如を「社会」の欠如と表現しています。

実際に環境問題について、環境破壊や環境汚染で多くの被害者、死者が出る事態が生じているとき、その被害者の声が政治にフィードバックされていくシステムがない限り、事態は決して好転しないという問題です。

朱先生の分析に関連して、それぞれの紛争にかかわっている人々を「アクター」、あるいは「主体」と表現して見ます。その主体には環境問題で言えば、汚染物質を流している工場、工場の労働者、被害を受けている住民、地方政府、そしてまた地方のメディア、あるいはそれに関心を持つ外国の研究者までもが含まれますが、そのような諸主体間では、利害関係の側面、価値観の相違の側面、この２側面において対立し、ときには協調するという関係が、必ず状況の中に生じています。

もちろん、主体間の価値観の相違と利害関係とは相互に簡単には切り離すことの出来ないものです。

そこで、開発という概念についてですが、開発概念は主体間の利害関係も価値観の相違も、状況的に含む概念です。ところで開発概念は改革開放が開始した当初には、必ずしも有力な概念としては存在しなかった。

1992 年に鄧小平氏が南巡講話を行ってのち、中国の高度経済発展が一気に加速化しましたが、その延長上に現れてきたのが開発の概念です。最も早くは、海南島の開発というかたちで開発概念が注目されました。

開発には極めて大きな資金が投下されます。したがって、グランド・プロジェクト（Grand Project）、ビッグ・プロジェクトという原理的な方向性、オリエンテーションが、そこには非常に強く見られること、さらに前提となるのは、市場競争原理の導入です。しかも、相当全面的な市場競争を求める、部分的な市場競争原理ではありません。

この点については、金観濤先生の今回の発言と少し関係があります。ポランニー（Karl Polanyi）は、今世紀の前半期に、最初に経済人類学の問題を出したわけです。そこで彼は、現代化（近代化）の３つの理念＝概念を問題にします。つまり、自由・平等・友愛という３つの政治理念、ポランニーによれば、この三大理念は近代化の過程で、それぞれ制度化されていくべきものでした。「自由」は自由主義精神の下で自由な交換としての自由市場制度を生み出します。「平等」は、社会主義という平等主義の精神の下で、計画経済制度、あるいは社会主義制度を生み出しました。しかし、ポランニーは「友愛」については、制度化のプロセスが起きる過程を十分指摘していないわけです。ただ、この点について、私の友人で千葉大学の岩田昌征氏が、ユーゴスラビアでかつて 1950 年代から 1980 年代後半期に至るまで試みられた労働者自主管理制度が、実は「友愛」の政治理念の制度化だったと指摘したことがあります。

問題は、この労働者自主管理体制は、社会主義計画経済制度と同様、非効率という極めて高いコストを払わねばならず、そのために、失敗を余儀なくされたというのが、岩田氏の立論です。

ここでなぜわざわざ「友愛」の政治理念を出すかというと、それはここで私たちが議論している「和諧」という概念と「友愛」という概念は、極めて密接に関係するからです。

例えば公害汚染が起こす社会状況のなかで、マックス・ヴェーバー（Max Weber）の用語で言えば、「インテラッセン・ラーゲ（Intelassen Lage）」、つまり社会的利害関係のなかで対立・矛盾を起こるだけでなく、もう１つ、倫理関係、あるいは価値観の関係においても、大きな対立が起こる。しかし、「友愛」とは、この対立関係を克服して１つの協調性を、そこに実現する道筋を探るということです。つまり、もともと仲のいい人たちが手を結んで、あるいはもともと協調性のある者だけが手を結んでつくる社会は、和諧社会ではあり得ないわけです。

「開発」に見られる社会的利害関係とはそこに投下される資金と密接不可分に生じます。大きな資金が動きますから、必然的に上から下へ、あるいは政権当局者と、政権内部に食い込んだ新興企業家階級が重要な主体として登場する。新興企業家階級のなかには、共産党に入党することによっ

て、しっかり政権に食い込んでいる層もいます。

そうした諸主体が、莫大な資金を通じて利害関係によって、例えば地方政府と結び付く、あるいは党組織と結び付くというかたちで、公害汚染問題を容易に解決せしめない、解決し難くさせているという状況があるわけです。

むろん、価値観の相違について、過去にいろいろな形で語られてきました。ご存じのように、最初はグンナー・ミュルダール（Gunnar Myrdal）による『Asian Drama』です。1962 年に、最初にケネディ大統領が「(国連の) 開発の 10 年」を述べました。その数年後、ミュルダールは 1968 年、『Asian Drama』を公刊し、開発援助に伴う格差の問題、地域間格差だけでなく、国家間格差、すなわち南北問題を引き起こすことをいち早く提起した。さらに、その格差が固定化されていく、さらにはますます拡大化していくということを、サミール・アミン（Samir Amin)、あるいはＡ．Ｇ．フランク（A.G.Frank）が「従属理論」として提起しました。

さらに 1973 年に、ビッグ・プロジェクト主義を否定する、Ｅ．Ｆ．シューマッハー（E.F.Schumacher）の『Small is Beautiful』(『小就是美』) という考え方も提起されてきたわけです。

しかし、その直後の 1970 年代後半から先程来、少し問題になっています、香港、台湾、シンガポール、それから韓国の４つのＮＩＥｓ が台頭し、さらに 1980 年代に入ると、ＡＳＥＡＮ諸国が台頭しました。さらに、それを追うかたちで、90 年代に中国、そして 21 世紀に入ってインドが台頭します。そのなかで、いわばビッグ・プロジェクト主義的な開発がもたらす利害の衝突、そして、社会的な巨大な矛盾が生じました。92 年にローマクラブが「成長の限界」を発表して警告を発したにもかかわらず、経済成長主義的な考え方が開発主義と結びついて肥大化した。それはいずれ天井にぶつかります。社会発展の１つの隘路となる性格を帯びているわけです。環境問題はその隘路の最も典型的なものです。実際、1992 年にリオで環境サミットが開かれました。地球規模のグローバルな環境汚染がいかに人類社会を危機におとしいれるのかということが問題になってきました。

「開発」という概念、開発主義は、中国でまだ依然として批判を浴びていません。開発主義とは、全面的な市場化政策とビッグ・プロジェクト主義の２つがセットになったものと、私は定義していますが、これを克服するのに、そこに含まれる価値観の相違を克服する道を模索することが重要になります。

価値観の問題は価値観と社会的利害関係が結合するという問題に集約される。社会的利害関係は権力関係に直結します。したがって、そこには価値観と政治権力の結合という問題が現れるわけです。この点はＭ・ヴェーバーではプロテスタンティズムと資本主義精神という宗教問題として扱われています。しかし、宗教の問題について言えば、私たちはやはりチベット仏教や法輪功のようなものについても言及せざるを得えません。もう少し言えば、宗教というものが、政治と分離され得ないかたちで存在している状況、一言で言えば、日本の宗教は政教分離の状態ですので、宣教の自由、あるいは信仰の自由を全面的に認めても問題は少ないのですが、中国の場合、あるいは途上国の場合を考えてみてください。インド、パキスタン、中近東の場合もそうです。どこでも政治と宗教は分離されていません。そこでの宗教＝価値観は政治的な利害関係と切り離しがたく存在しているのです。

したがって、宣教の自由、信仰の自由を利害関係の相克という現実情況から離れて、抽象的な人権観のレベルで乱暴な議論をすることは解決の道につながらない。「和諧社会」を追求していく際、利害関係のなかに研究者の主体が踏み入り、そこに働く価値観や倫理観にまで切り込んでいくということが必要です。私たちは外国人ですから、張玉林先生のようにはできないと思います。しかし、そのような姿勢は少なくとも持たなくてはならないということがあると思います。

具体的に言えば、事例研究をしっかりとやり、そこにどのような利害対立があり、またどのような価値観の対立があり、そこにいかなる解決策が見出され得るかということを、具体的事例に沿って見つけ出さなければなりません。

劉青峰先生の観念史の問題も議論したかった

のですが、時間が切れてしまいましたので、これで私の報告を終えたいと思います。

○座長　では、コメントに入りたいと思います。最初に臧志軍先生、お願いします。

コメント
臧志軍（復旦大学）

谢谢主持人。刚才几位的发言非常精彩，我从当中学到了很多东西，有一些领域不是我熟悉的领域，所以，我这个评论有一些可能带有请教，或者谈一点自己的感想，学习的感想。金老师的报告，他从博莱尼一些核心范畴出发，就是“嵌入”这个范畴出发，指出市场经济等等这些东西从传统社会或者传统的一个整体化的有机体当中“脱嵌”，这是人类社会发展的一个宿命，没有办法摆脱的这样的一个结局。并且，他认为现代社会已经不是一个传统的有机体，这样的社会，也不可能再成为一个有机体。因此，要解决现代社会当中的那种不和谐，那种矛盾的话，就是只能在现代性的基础上找出路。我认为，他的这个观点是非常值得我们深思的，非常具有启发性的。金老师并且提示在现代社会当中，已经出现了对现代社会的一些价值已经出现了一些修正的动向，比如说对民族主义的纠正，比如说对个人主义个人权力的修正，讲到了这些方面的问题，我认为是非常有启发的。我想请教的，实际上有这么两个问题，一个是这种修正它的动力来自于何处？就是这种修正是人类社会自我进行的一种修正，这种动力的来源如果是来自于人类自身的话，是不是可以认为就是说人类社会当中的某一些结构某一些东西它是不会脱嵌，有没有这样的地方？这是我的第一个问题，第二个问题是，今天讲到了价值的修正，比如讲到了 Rawls 的正义论，我的问题是，Rawls 是一个政治哲学家，他的这种正义论在政治层面，或者说在操作的层面是不是可能？当然这个已经超出了今天研究的范围。Rawls 认为，所谓公平正义是指所有的好的东西都应该平均分配，除非有利于地位最弱的人。按照我的理解的话，这种标准在一个有血缘亲属关系的，比如在一个家庭当中，是不难实现的。比如说一个三口之家，有个小孩，今天晚上的晚餐怎么安排，这个当然不会平均的分配，小孩很小他不能吃很多的东西。但他会有一个分配，夫妻双方认为这个孩子是一个弱势群体，然后我们会给他一些照顾。但是在一个社会当中，谁来认定谁是弱势群体，然后，谁来认定这个群体他需要什么样的帮助，需要何种程度的帮助？我就觉得 Rawls 的这个概念在操作当中，是很困难的。如果可能的话，请金老师谈谈您的想法，这是提出的问题。

第二是关于刘老师的论文。刘老师的论文就是从对概念的定义，即从词源，以及它们在近代的变化展开分析。通过这样一种研究方法的展示，她向我们提示了一个研究方面非常重要的问题，就是我们一定要注意概念的定义和它的使用，它的变化，以及它同文化的关系。我觉得这个提示是非常重要的。我们要注意概念以及概念的变化，它的内涵的变化。第二，刘老师指出，目前在中国所谓“和谐”这个观念，它的价值指向是含糊的。对于这一点我非常同意，我觉得非常精辟。并且，刘老师指出“和谐”的观念必须在现代的价值系统当中，也就是在一个宪政的架构当中才能够找到它的恰当定位。我认为这一点也是非常重要的。顺着刘老师所展示的研究方法，我想讲的是，我们在研究公共政策问题时，要特别注意对于问题本身的定义。我们今天从上午开始，实际上从昨天开始，讨论环境问题等等一些问题。有些学者试图给政府开药方，指出在政策的层面应该怎么来做。我认为，如果涉及到要开“药方”的话，我们可能还需要做一项工作，我们要对问题作进一步的定义，要明确化。比如说我们要解决的当然不是“失业现象”，而是“失业问题”，那么，什么是“失业问题”？城镇登记失业率超过多少算是“失业问题”，对此，我们要有一个明确的定义，要有一个很清楚的定义。在这个定义的基础上，我们就可以开药方。如果我们只是公众议程的层面讨论这些问题，那没有关系，但是我们如果要开“药方”的话，则需要对于这些问题作进一步的定义。这是我受刘老师的方法论启发所谈论的一点感想。顺着这一点，我还要指出一个现象，我们